Tsukuba Psychological Research
1992, **14**, 159-169

大学生における自我同一性と分離個体化の関連について

筑波大学心理学研究科　井上　忠典

筑波大学心理学系　佐々木　雄二

Study on the relationship between ego identity and separation-individuation among university students

Tadanori Inoue and Yuji Sasaki(*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

To investigate the relationship between ego identity and separation-individuation, 342 university students were requested to answer two questionnaires: the identitiy status scale developed by Kato (1983) and Japanese Separation-Individuation Test of Adolescence (Takahashi, 1989). The aspects of separation-individuation by identity status were found as follows : 1)The students with identity achievement status were mentally separated from parents and changed objects of cathexis from parents to friends. They established the boundary with others. 2)The students with foreclosure status continued the symbiosis with parents and kept the ambiguous boundary with others, being conscious of established relationship with friends so that they possessed a high degree of self-centeredness. 3)The students with moratorium status had little difference from those with identity achievement status and seemed to be on their way to the latter status. 4)The students with identity diffusion status possessed a high degree of conflict of independence-dependence and failed to form the boundary with others.
Key words : ego identity status, separation-individuation, university students.

【 問　題 】

心理的な問題や症状を抱えた青年には，その問題や症状の背後に自我同一性の障害をもつものが多くみられる(西園，1972；中西，1983)．このような青年に対して，自我同一性の確立を促していく視点として，心理臨床において分離個体化の理論が注目を集めるようになってきている．

自我同一性(ego identity)と分離個体化(separation–individuation)は，それぞれ独立した概念として提唱されてきた．自我同一性は，自我心理学の流れを組むErikson (1959)によって提唱された．一方，分離個体化は，対象関係論の流れを組むMahler(1975)により提唱され，Blos(1962，1967)によって青年期の心性の理解に適用されて，第2の個体化過程(the second individuation process)として理論化された．しかし，その両者の関連について実証的に検討された論文はほとんどなく，その関連を明らかにすることは，青年期の研究においても青年を対象とした心理臨床においても，重要なことと思われる．すなわち，同一性障害を示す患者に対して，分離個体化を促すような治療を進めることが同一性形成に有意義なことなのか，確認する必要があると思われる．

Erikson(1959) は，自我同一性を思春期・青年期において出会う心理社会的危機として捉えた．この時期における特色は，それまでの親に依存した存在から離れて，社会の中で是認される一定の役割を遂行する自立的な主体として，自己を主体的に，自覚的に選択し直していくことである．つまり，「自分であることの確立」が社会との同意の上でなされる必要があり，青年はそのために，「自分がなんであるのか」という問題に取り組み，対決しなければならない．そして，時間的な自己の不変性と連続性に

ついての自己意識と，他者によってそれを認められているという意識による安定感，及び自分が特定の社会の中で有効な歩みを進めつつあるという確信，すなわち，自我同一性を確立することを青年期の発達課題とした．そしてこの発達段階で起こる危機を，同一性拡散として捉えた．

一方，分離個体化の概念は，Mahler(1975)が乳幼児の発達過程について用いた概念であり，乳幼児が母親との未分化な存在から一個の独立した個人として誕生するまでの精神内的過程である．言い換えれば，幼児が母親表象を内在化し，情緒的対象恒常性を確立するまでの過程である．

人間は出生時には未熟であり，生存上乳児は絶対的に母親に依存し，母親に融合し一体であるという幻想のもとに誕生する．この時期は，正常な自閉段階と呼ばれる．2カ月目以降になると，正常な共生段階に入り，欲求充足対象がぼんやりと意識されてくるにしたがい，内部と外部の識別が生じてくる．つまり，母子の間に境界が生じてくるが，その境界は流動的であり，満足が与えられ欲求が解消されると境界も消失する．その後，生後5カ月から36カ月程度までを分離個体化期とした．それまで二者単一体であるかのように機能していたのが，感覚，知覚，記憶，運動機能の発達にともない，自己の身体像を母親の身体像から分化させるようになる．次第に乳児は自分のまわりの世界を積極的に探索し始め，自分の活動に夢中になっているように見えるが，母親を基地として周期的に母親のもとへ帰ってきて，情緒的供給を求める．さらに運動能力が高まるにつれて，分離の意識が生じてくる．自分の意志で自由に動けるようになる喜びと同時に，分離不安が増大し，依存と独立の葛藤が激しくなる(再接近期危機)．母親から離れてみたり近づいてみたりして，母親と自分の距離を調整し，適当な距離を見出そうとする．そのようにして母親と自分が異なる存在であることを確認し，安定した母親の表象と自己の表象を確立できるようになる．これが個体性の確立と情緒的対象恒常性の始まりである．

分離個体化過程が，乳幼児が母親表象を内在化し，対象恒常性を確立するまでの過程であるとすると，Blos(1967)のいう第二の個体化過程は，親から精神的に離れ，自立し，個を確立していく過程といえる．父母対象から脱備給されたリビドーによる自己愛の高まりは，自我理想を発展させ，この自我理想と投影・同一視によって同性の相手を互いに理想化しようとする自我の流れは，同一性形成へと発展していく．この過程は，乳幼児期の分離個体化過程に相似しており，「乳児が共生膜から孵化して独立した幼児となるのと同様に，青年は家族への依存から独立し，幼児的な対象との結びつきを緩めることによって大人社会の仲間入りをする．」しかし，その過程で「幼児的な依存，誇大感，安全性，満足といったものへの力強い退行的な引き戻しから逃れる」ことを必要とする．これは，幼児の再接近期における再結合への願望と飲み込まれ不安に対比されるものである．すなわち，再接近期危機が青年期に再燃することを意味する．

小此木(1980)は，青年期の課題を，①父母対象表象からの脱備給と，父母に対する境界の確立，それに伴う対象喪失－悲哀のプロセス，②親密さの同世代の同性・異性の共有と，男性・女性同一性の確立，③エディプス・コンプレックスの解決，④乳児期以来の超自我・自我理想，家庭内の価値観・自己像などと，家庭外の社会的現実との出会いによるこれらの再構成，⑤家庭内の古い自己と家庭外の新しい自己との使い分けと，自我の再統合というものを挙げて，これらの発達課題の達成が自我同一性の確立につながるとしている．これは，第2の個体化が自我同一性の基盤となっていることを示すものである．また，自我同一性形成につまずいた青年の生活史を聴いてみると，第一の分離個体化過程に何らかの障害があったことがわかるという指摘もされている(佐野，1990)．

Eriksonは自我同一性を心理社会的な発達課題として，Blosは第2の個体化を精神内界における発達課題として捉えた．しかし，この2つの概念は独立したものではなく，青年の発達を二つの側面から捉えた表裏一体のものと言える．そして，青年期における分離個体化が自我同一性の基礎を形成しているならば，分離個体化を促すことが同一性障害を表している青年にとって有効であると考えられる．そこで，自我同一性と分離個体化の関連を明らかにするために，大学生を対象にそれらに関する質問紙を実施して，自我同一性によって分離個体化の様相がどのように異なるのかについて検討することを目的とした．

【研究1．大学生における分離個体化について】

1．目　的

青年期の分離個体化について実証的に検討するための質問紙は，ほとんど開発されておらず，全体的に把握しようとした研究は少ない．その中でも，Levineら(1986)は，養護－共生，のみこまれ不安，分離不安，欲求否認，自己中心性，健康的分離の6つの基本的な次元を想定し，Separation-Individuation

Test of Adolescence(SITA)を作成した．高橋(1989)は，このSITAをもとに100項目よりなる日本版(SITA日本版：JASITA)を作成し，小学校6年生から大学4年生まで青年期全般にわたる被検者を対象に調査を行い，青年期の分離個体化を規定している7因子(52項目)を抽出した．

青年期全般を対象とした場合に比べると，青年期後期に属する大学生では，その時点での分離個体化を特徴づける要因が異なると考え，本研究では，改めて大学生の分離個体化を規定する因子を抽出することを目的とした．

2．方　法

a．調査対象：T大学生 342名(男子 187名，女子 155名)．年齢の幅は，18才から23才まで．

b．調査期日：平成3年6月．

c．質問紙：青年期の分離個体化に関する質問紙は，前述のＪＡＳＩＴＡを用いた．先行研究(高橋，1989)によれば，この質問紙は，「両親からの分離欲求」「対人交流の拒否」「自惚れ」「共生欲求」「分離個体化の達成」「友人関係の確立」「一人でいられなさ」の7因子52項目よりなっているが，尺度構成が行われていないので，因子による項目の分類をしないで実施した．

d．手続き：調査は，授業時間の一部を用いて調査者の指示により集団で実施した．調査の所用時間は，研究2で使用する同一性地位判別尺度の実施時間も含めて，約20分であった．教示および評定法については，原法をそのまま用いて，「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5段階で評定させた．

3．結　果

a．因子分析の結果

「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5段階の評定を，順に5点から1点まで点数化し，JASITA 52項目について 342名の反応をもとに，主因子法により因子を抽出し，ヴァリマックス法により因子軸を回転させて，先行研究にならい7因子を抽出した．そして，因子ごとに0.4以上の因子負荷量を持つ項目を選んで各因子を構成する項目とした(Table 1)．第7因子については，この基準を満たす項目が選定されず，不適当と考え省いた．なお，第7因子を除く6因子は，全分散中の34.0%を占めていた．

b．因子の命名

上記の基準によると第1因子を構成する項目は7項目であった．これらの項目は，友人関係の拒否，あるいはその逆の親密さを示すものであり，友人関係を確立できていない状態を表している．このことから第1因子を「友人関係の未確立」と命名した．

同様にして，第2因子を構成する項目は7項目であった．これらの項目は，親から心理的にも物理的にも距離をとろうとする態度，つまりのみこまれ不安が示されている．このことから第2因子を「両親からの分離欲求」と命名した．

第3因子を構成する項目は7項目であった．これらの項目は，周囲の人から極端な肯定的反応を期待したり，自分の能力に対して過度な肯定的評価を下す態度が示されている．このことから第3因子を「自惚れ」と命名した．

第4因子を構成する項目は5項目であった．これらの項目は，空間的・時間的に親と場を共有することを求め，離れたくない態度，つまり分離不安が示されている．このことから第4因子を「両親との親密さ欲求」と命名した．

第5因子を構成する項目は4項目であった．これらの項目は，誰もいない状態では安定していられず，人とのつながりを求めようとする態度が示されている．このことから第5因子を「一人でいられなさ」と命名した．

第6因子を構成する項目は4項目であった．これらの項目は，人と接近し過ぎてもいないし，拒否してもいない，適当な対人関係での距離のとり方のできる状態であり，自己と他者の心理的な境界が確立されていることを示している．このことから第6因子を「分離個体化の達成」と命名した．

4．考　察

JASITA(52項目)を大学生に用いて因子分析をすると，「友人関係の未確立」「両親からの分離欲求」「自惚れ」「両親との親密さ欲求」「一人でいられなさ」「分離個体化の達成」の6つの因子が抽出された．

「友人関係の未確立」は，先行研究では「対人交流の拒否」と「友人関係の確立」の2つに分かれていた因子がまとまったものである．先行研究の2つの因子は，友人関係についてちょうど逆方向の因子と考えられるが，大学生よりも前の段階では，対人交流を拒否していても友人関係は確立していると感じられることがあることを示している．つまり，友人関係についてアンビバレントな感じを持ち得ているのであろう．大学生になると，そのアンビバレントな感じがなくなり友人関係のもち方が安定するために，1つの因子にまとまったと考えられる．

先行研究の「両親からの分離欲求」は，本研究では「両親からの分離欲求」と「両親との親密さ欲求」の2つの因子に分かれ，独立した因子として抽出さ

Table 1　各因子の項目と因子負荷量

因子		項目	負荷量
I	友人関係の未確立	* 9. 私には何でも話せて一緒にいるととても安心できる友達がいる。	-.729
		10. 人を心の底から信用するなんて私にはできそうにない。	.657
		*23. 私のことをとても良く知っていて、私が何を考えているのか本当に分かっているような友達がいる。	-.628
		51. 親友はとくに必要だとは思わない。	.586
		12. いくら仲の良い友達であっても、私が本当に困った時に助けてくれるとは限らない。	.571
		* 8. 私は友達のやることを認めているし、友達も私のやることを認めてくれる。	-.498
		24. 友情はそれ程大切にする価値のないものだ。	.453
II	両親からの分離欲求	33. 親が邪魔で私は本当にやりたいことができない。	.724
		37. 私は親に自由を束縛されていると思う。	.644
		45. 親は、私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことが時々ある。	.580
		14. 親が私にやれということには反感をおぼえる。	.572
		30. 親は、私を生んだことを時々後悔しているようだ。	.567
		*36. 私は親を尊敬している。	-.448
		48. 自分の家にいても私はくつろげない。	.425
III	自惚れ	52. 私の能力にみんなしびれていると思う。	.733
		47. 私は周囲から尊敬されている。	.716
		49. 友達の中では私がいつも注目の的です。	.699
		16. 時々自分の能力と才能に私はびっくりしてしまう。	.614
		44. 他の人は、私のすることにちょっとしたことでも感動する。	.447
		50. 私はみんなからいい奴だと思われている。	.442
		6. 友達といる時は、たいてい私がリーダーになる。	.436
IV	両親との親密さ欲求	40. 私は親といつまでも一緒に暮らしたい。	.609
		46. 私は親といるときが一番落ち着く。	.589
		7. 一日以上親と離れていると寂しくなる。	.506
		* 3. 一人暮らしをして、親から自由になれる日が待ちどおしい。	-.490
		*13. 親といるよりも友だちといるほうが楽しい。	-.457
V	一人でいられなさ	17. 一人でいる時、友達が一緒にいないのが寂しくて友達のことを考えてしまう。	.690
		41. 夜寝る時、時々寂しくなって話し相手がそばにいればなあとか、そばに誰かいるだけでもいいのになあとか思うことがある。	.620
		2. 一人でいると私は怖くなってしまう。	.573
		34. 一人でいるとふと寂しくなって友達に電話をかけたりすることが時々ある。	.568
VI	分離個体化の達成	15. 友達と何時も一緒にいるのではなく、たまには一人で物事を考えたりする時間も欲しい。	.499
		19. 親しい友人であっても、あるところでは私と意見が合うが、意見が合わないところもある。	.470
		29. 親のいうことが絶対に正しいとは限らない。	.464
		35. 友達と一緒に遊んだり、ガールフレンド（ボーイフレンド）とデートしたり、一人で何かをしたり、いろいろな時間を持ちたい。	.438

注）* は逆転項目

れた．このことは，前述の「友人関係の未確立」とは逆に，大学生になると両親に対して離れたいけど親密でいたいというアンビバレンとな感じが高まることがあることを示している．すなわち，のみこまれ不安と分離不安という両方の不安が活性化され，再接近期危機が再燃している様子が窺える．

「自惚れ」「一人でいられなさ」「分離個体化の達成」については，先行研究と比べると，項目数が減ってはいるものの全く同様の項目を含む因子として抽出された．これらについては，青年期全般を通じて独立した特性として挙げられるものである．また，先行研究に含まれていた「共生欲求」の因子が本研究では抽出されなかったが，この因子に含まれる項目の示していた内容は，未熟な分離不安にもとづく退行的な共生欲求であり，大学生にとっての特徴的な因子にはならなかったと考えられる．

第２の個体化過程では，まず両親表象からの脱備給が生じて，そのリビドーが自己に向かうことで自己愛が高まり，それが自我理想を発展させて，同性の友人に対する投影・同一視を生じさせる．このような自我の流れにより，青年は両親への依存から脱却して，他者との境界を形成し，独立した個人としての存在を確立させる．「両親からの分離欲求」と「両親との親密さ欲求」は，それぞれのみこまれ不安と分離不安を示しており，両親表象からの脱備給の様相を表している．「自惚れ」は自己愛の高まりによる全能感について示し，これが極端な場合には現実検討の低下を招くと考えられる．「友人関係の未確立」は友人への投影・同一視の困難さについて示している．同性の友人は自我理想を形成していく上で重要な役割を果たし，これが欠けると自分が進むべき方向を見失うことになる．「分離個体化の達成」は両親だけでなく友人も含めた他者に対して，自己との間に心理的な境界を形成できているかどうかを表している．また，「一人でいられなさ」は，Winnicott (1965)のいう「一人でいられる能力」に対応するものであり，彼は，孤独に耐える能力を持てる人であって，初めて対人関係を適切に保てると述べている．両親から分離して自立にともなう孤独を耐え得るためには，両親表象を内在化して情緒的対象恒常性が育っている必要がある．これに欠けると，他者と離れている状態では自己が安定せず，その不安から他者とのつながりを求めようとすると考えられる．

以上のことから，因子分析によって抽出された６つの特性によって，大学生の分離個体化の様相を力動的な観点から描き出すことが可能であると考えられる．

【研究２．自我同一性地位による分離個体化の様相について】

１．目　的

本研究では，自我同一性と分離個体化の関連を明らかにするために，自我同一性地位によって分離個体化の様相がどのように異なるのかについて検討することを目的とした．

自我同一性を実証的に検討するためのアプローチには，大別して２つのものがある．一つは，達成－拡散を両極とする１次元の連続体として自我同一性をとらえるものである．もう一つは，Marcia(1966)によって提唱された自我同一性地位によるものである．これは，自我同一性概念よりも抽象度の低い危機(crisis)と自己投入(commitment)の２つの要因で定義し，これにより，同一性達成(identity achievement)，モラトリアム(moratorium)，早期完了(foreclosure)，同一性拡散(identity diffusion)の４つの自我同一性地位に分類されるものである．本研究では，自我同一性と分離個体化の関連を明らかにする際に，その質的な検討を可能にするために自我同一性地位によるアプローチを採用した．

２．方　法

ａ．調査対象・調査期日・手続き：研究１におけるJASITAを実施する際に，同時に自我同一性地位を測定する質問紙を実施した．したがって，調査対象・調査期日・手続きについては研究１と同様である．

ｂ．質問紙：研究１においてJASITAの因子分析によって抽出された各因子に含まれる項目をまとめて分離個体化尺度の下位尺度とした．下位尺度ごとに得点を出すために，「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの５段階の評定を，順に５点から１点まで(逆転項目はその逆)点数化し，その平均点をその下位尺度の得点とした．

自我同一性地位を測定する質問紙として，同一性地位判別尺度(加藤，1983)を用いた．この尺度は，「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の３つの変数を用いて各４項目計１２項目から構成されており，これによって同一性地位を判別しようとするものである．同一性地位判別尺度は，原法に従い「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの６段階で評定させた．

ｃ．自我同一性地位による群分け

加藤(1983)の分類方法を参考にして，同一性地位判別尺度をもとに，同一性達成地位(Ａ群)，権威受容地位(Ｆ群)，モラトリアム地位(M群)，同一性拡

散地位(D群)の4群がほぼ同数になるように群分けを行った(Fig. 1).「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの6段階の評定を，順に6点から1点まで(逆転項目はその逆)点数化し，「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3つの変数ごとに合計点を算出し，その変数の得点とした.

まず，「現在の自己投入」は平均15.9点であったので，ほぼ同数になるよう2群に分けるために，17点以上をA群及びF群に，16点以下をM群及びD群に振り分けた．次に，「現在の自己投入」の得点が17点以上であった被検者のうち，「過去の危機」(平均18.7，SD 3.3)の平均＋1SD(22点)以上の得点を得た者をA群,「過去の危機」の平均＋1SD(15点)以下の得点を得た者をF群とした．同様に，「現在の自己投入」の得点が16点以下であった被検者のうち，「将来の自己投入の希求」(平均15.9，SD 3.1)の平均＋1SD(19点)以上の得点を得た者をM群とした．また，D群は，加藤(1983)の分類に従い，「現在の自己投入」12点以下かつ「将来の自己投入の希求」14点以下とした．これにより，A群39名，F群34名，M群41名，D群32名が抽出された.

3．結果と考察

a．分離個体化の下位尺度及び同一性地位判別尺度の関係

分離個体化の下位尺度間の関係を調べるために，それぞれの相関を求めた(Table 2)．6尺度間の相関，計15尺度間中7尺度間で有意な相関(P〈.01)がみられた．「自惚れ」については，「友人関係の未確立」との間に負の相関がみられたが，それ以外の尺度との間に有意な相関がみられなかった．また，「一人でいられなさ」については「両親からの分離欲求」との間に弱い正の相関がみられたが，それ以外の尺度との間に有意な相関がみられなかった．また，「分離個体化の達成」について，「友人関係の未確立」と「両親との親密さ欲求」との間に弱い負の相関がみられたが，それ以外の尺度とは有意な相関がみられなかった.

同一性地位判別尺度と分離個体化の下位尺度との関係を調べるために，それぞれの相関を求めた(Table 3)．「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」について，「友人関係の未確立」との間に負の相関が，「自惚れ」との間に正の相関がみられた．また，「過去の危機」と「将来の自己投入の希求」について，「両親との親密さ欲求」との間に弱い負の相関が，「分離個体化の達成」との間に正の相関がみられた．また，「過去の危機」について「両親からの分離欲求」との間に弱い正の相関がみられた.

友人関係を確立していることと自惚れが強いことは相関が高く，このことは，自己愛の高まりから友人へのリビドーの備給が生じているためと考えられる．その結果，自我理想の形成が促され，現在の自己投入が促進されるのであろう．しかし，両親から分離欲求や親密さ欲求，及び分離個体化の達成は，現在の自己投入よりも過去の危機の経験に関係している．つまり，過去の危機の経験は両親からのリビドーの脱備給について表していると考えられる．さらに，将来の自己投入を希求するには，友人関係を確立していることと同時に，分離不安を克服し他者

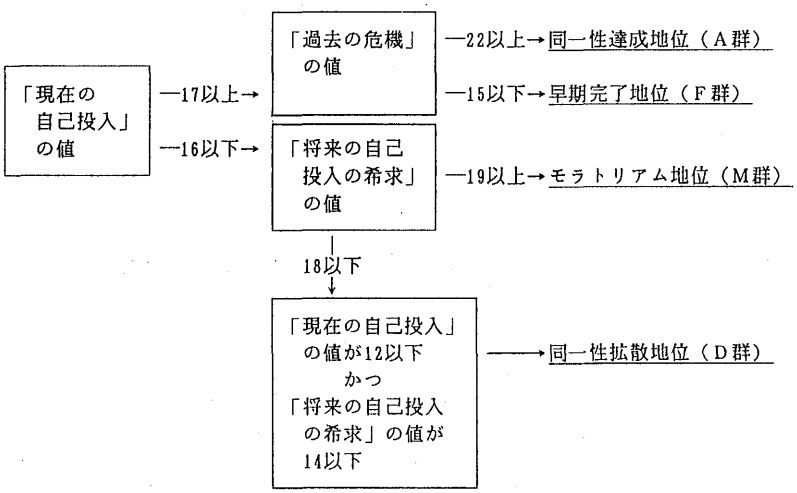

Fig. 1　各自我同一性地位への分類の流れ図

Table 2　分離個体化の下位尺度間の関係

	両親からの分離欲求	自惚れ	両親との親密さ欲求	一人でいられなさ	分離個体化の達成
友人関係の未確立	.299 *	-.307 *	.167 *	-.104	-.139 *
両親からの分離欲求		-.069	-.249 *	.185 *	-.073
自　惚　れ			-.078	.020	.044
両親との親密さ欲求				.034	-.244 *
一人でいられなさ					.019

注）N=324～340.　* : P<.01

Table 3　同一性地位判別尺度各変数と分離個体化下位尺度との関係

	友人関係の未確立	両親からの分離欲求	自惚れ	両親との親密さ欲求	一人でいられなさ	分離個体化の達成
現在の自己投入	-.337 *	-.123	.336 *	-.105	-.124	.122
過去の危機	-.084	.150 *	.060	-.164 *	.100	.272 *
将来の自己投入の希求	-.362 *	-.105	.282 *	-.139 *	.083	.234 *

注）N=327～342.　* : P<.01

との境界を確立している必要がある．すなわち，単に現在の自己投入が将来につながるだけではなく，過去の危機を経験していることも将来の自己投入につながると考えられる．

b．分離個体化下位尺度に表れる自我同一性地位の特徴

自我同一性地位の群ごとに，それぞれの下位尺度について平均点のプロフィールをFig. 2に示した．分離個体化の各下位尺度について自我同一性地位の変数が影響を与えているかどうかを，1要因の分散分析を用いて求め，さらに，有意な効果がみられた場合には，LSD法による多重比較を行った(Table 4)．

「友人関係の未確立」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意であった($F(3,142)=13.89$, $P<0.01$)．LSD法を用いた多重比較によれば，F群とD群，A群とD群，M群とD群の間に有意差があった($MSe=0.40$, 5%水準)．同一性拡散地位が他の3つの地位に比べて高い得点を示した．この地位の個人は，対人交流を拒否し，友人関係が確立できていないことを表している．自分にとって意味のある事柄に積極的に関与しようとすれば，現在もっている友人関係の中に自ら入っていくことが必要となるが，その際には，他者との交流から葛藤が生じる．その葛藤を回避するために，その交流から引きこもっていると考えられる．その結果，自己投入すべき事柄を見出せないし，また，見出そうとも思わない状態になっていると考えられる．

「両親からの分離欲求」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意であった($F(3,141)=4.75$, $P<0.01$)．LSD法を用いた多重比較によれば，F群とM群，F群とA群，F群とD群の間に有意差があった($MSe=0.45$, 5%水準)．権威受容地位が他の3つの地位に比べて低い得点を示した．この地位の個人は，自らの可能性探究の主体的な試みを早々と打ち切ってしまい，それゆえ過去に危機を経験することなく，両親や社会的常識が認めるものをそのまま受け入れ，それを自己投入の対象としている．その意味では，自らの主体性を放棄しているために，両親に対する反発を生じることもなく，分離欲求も低いと考えられる．

「自惚れ」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意であった($F(3,142)=6.34$, $P<0.01$)．LSD法を用いた多重比較によれば，D群とA群，D

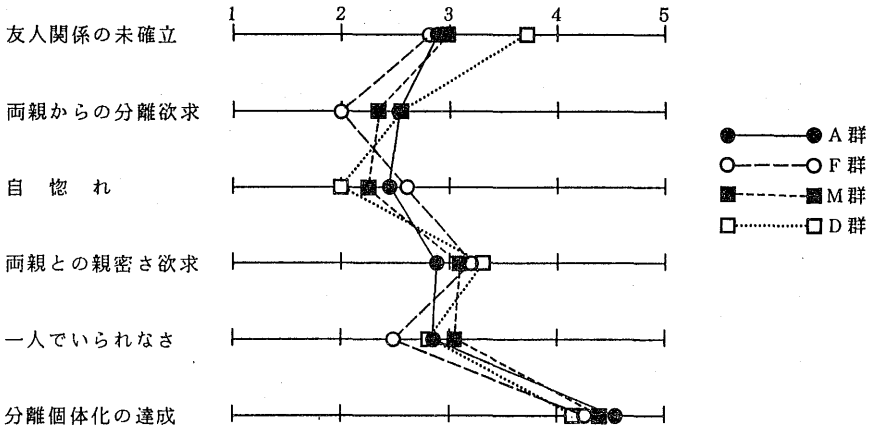

Fig. 2　自我同一性地位群による分離個体化尺度のプロフィール

Table 4　自我同一地位判別群による分離個体化尺度の分散分析と多重比較の結果

	F値	同一性地位群の順序と平均(SD)				多重比較
友人関係の未確立	13.89**	F 2.82 (0.52)	A 2.90 (0.65)	M 2.99 (0.61)	D 3.72 (0.75)	F A M D
両親からの分離欲求	4.75**	F 1.99 (0.53)	M 2.34 (0.62)	A 2.50 (0.85)	D 2.55 (0.61)	F M A D
自　惚　れ	6.34**	D 2.02 (0.52)	M 2.26 (0.65)	A 2.45 (0.61)	F 2.60 (0.75)	D M A F
両親との親密さ欲求	2.86*	A 2.88 (0.59)	M 3.09 (0.66)	F 3.21 (0.63)	D 3.30 (0.61)	A M F D
一人でいられなさ	2.58+	F 2.48 (0.83)	D 2.82 (0.81)	A 2.86 (0.96)	M 3.05 (0.91)	F D A M
分離個体化の達成	4.56**	D 4.20 (0.46)	F 4.25 (0.47)	M 4.40 (0.45)	A 4.54 (0.38)	D F M A

注）+:P<.10　*:P<.05　**:P<.01
┌─┐でつながれた群間に有意差（P<.05）があることを意味する

群とF群，M群とF群の間に有意差があった(MSe＝0.33,5%水準)．権威受容地位が高い得点を，同一性拡散地位が低い得点を示した．同一性拡散地位の個人は，自己投入する対象を確定することができず，主体的な意志によって生きていこうとする姿勢に欠けており，自惚れがないというよりも自分自身に対する自信のない状態にある．また，過去に危機を経験していない権威受容地位の個人は，それまでの自分のあり方に疑いを持つことなく現在に至っているために，過剰な自信としての自惚れが強いと考えられる．これに対して，同一性達成地位やモラトリアム地位では，自惚れは中程度に留まっている．前者はすでに危機を経験した上での自己投入をしており，後者では危機を経験しながら自己投入しようと努めているところであり，いずれも単に両親が認めるものをそのまま受け入れるわけではなく，自分に

とって意味のある事柄を葛藤を経験しながら主体的に探究してきた，もしくは探究している最中である．したがって，この下位尺度に表れている自惚れは，自らが現実の世界に関わる中で形成されてきた自信の反映であり，権威受容地位の個人の示す自惚れとは質的に違いがあると予想される．

「両親との親密さ欲求」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意であった($F(3,133)=2.86$, $P<0.05$)．LDS法を用いた多重比較によれば，A群とF群，A群とD群の間に有意差があった($MSe=0.39$, 5%水準)．同一性達成地位が低く，それよりも同一性拡散地位や権威受容地位が高い得点を示した．この下位尺度は，「両親からの分離欲求」と逆方向を示すものであり，その意味では，同一性達成地位が低く，権威受容地位が高い得点を示すことは肯ける結果である．しかし，同一性拡散地位の場合には，両親からの分離欲求も親密さ欲求も高いという一見矛盾する結果となった．これは，この地位の個人が，両親に対してアンビバレントな感情を抱き，独立－依存の葛藤を強く持っていることを表していると考えられる．

「一人でいられなさ」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意な傾向があった($F(3,139)=2.58$, $P<0.10$)．LSD法を用いた多重比較によれば，F群とM群の間に有意差があった($MSe=0.78$, 5%水準)．権威受容地位とモラトリアム地位の間で差がみられ，前者は後者よりも低い得点を示した．この尺度は，一人でいることができず，他者，特に友人との接触を求めようとする態度である．権威受容地位の個人は，両親によって認められたものながらも自己投入する対象を確定しており，心理的には安定しているために対人的接触を求める必要性が低いのであろう．それに対して，モラトリアム地位の個人は，自己投入の対象を探究している最中であり，その対象を希求するもののなかなか確信の持てないという葛藤の強い状態であり，心理的には不安定である．それゆえ，一人でいることができず，対人的接触を求める傾向が高いと考えられる．

「分離個体化の達成」では，分散分析の結果，群の要因の効果は有意であった($F(3,141)=4.56$, $P<0.01$)．LSD法を用いた多重比較によれば，D群とM群，D群とA群，F群とA群の間に有意差があった($MSe=0.20$, 5%水準)．同一性達成地位が高い得点を，同一性拡散地位が低い得点を示した．この下位尺度は，他者との適切な心理的距離を持ち得ているかどうかを表すものである．他者に対して近づきすぎても，あるいは離れすぎても不安になることなくいられること，つまり自己と他者との境界の確立が必要である．そのためには他者が自分をどのように評価しているかという認知と，それにともなった自己への確信が安定していなければならない．同一性達成地位と同一性拡散地位では，この点に違いがみられるのだろう．

c．各自我同一性地位の分離個体化の様相

分離個体化の下位尺度と同一性地位判別尺度との関係，及び，分離個体化の下位尺度に表れたそれぞれの自我同一性地位における特徴を示したが，以上のことをもとに，それぞれの同一性地位を分離個体化の観点からまとめてみよう．

同一性達成地位の個人は，両親からの分離を果たしているようであり，親密さ欲求は低い．ただし，両親からの分離欲求がまだある程度の高さを維持している．このことは，両親に対しての分離不安はないものの，のみこまれ不安はまだ残っていることを示している．しかし，他者との境界の確立がなされて，両親から友人への備給の転換も適切になされている．それゆえに，自我理想の形成が進み，確信を持って自己投入することができている．

権威受容地位の個人は，両親からの分離欲求は低く，親密さ欲求が高い．つまり，分離不安が強く，のみこまれ不安が低い．このことから，両親との心理的な共生状態が継続していると考えられる．そのため，自己愛が高まったままであり，非現実的な全能感にもとづく自惚れが強い．友人関係は確立されていると感じていて不適応感はないものの，他者との境界があいまいなままであることから，両親との共生的な関係を友人関係にそのまま適用していることが窺える．したがって，自己投入する事柄を持っているが，強い葛藤を経験する事態に陥ると，それに現実的に対処することが困難になることが予想される．

モラトリアム地位は，ほとんどの下位尺度において中間的な傾向を示し，同一性達成地位との差が見られないことから，同一性達成地位に移行する途上にあると考えられる．この地位の個人は，過去の危機を経験し，両親から友人へと何とかリビドーの備給を向け変えようと努めながら，自己投入の対象を希求している．そのためには，自我理想を形成する上で重要な役割を果たす友人の存在が必要であり，その存在があることで心理的に安定できる．

同一性拡散地位の個人は，両親からの分離欲求及び親密さ欲求のいずれも高く，のみこまれ不安も分離不安も強い．つまり，両親に対して依存－独立の葛藤が強く，アンビバレントな感情を抱いている．そのため他者との境界を形成することに失敗しており，適切な友人関係を結ぶことが困難で，周囲から

の自分の評価についても否定的な感じを持っている．その結果，自我理想を形成できず，現在自己投入するものもなく，将来にわたってもそうしようとは思わない状態になっている．

4．おわりに

自我同一性は，心理社会的な側面からみた場合の青年期の発達課題として取り上げられてきた．しかし，それが確立される過程では，むしろ対象関係を中心とした分離個体化の観点からみることにより，精神内界での力動が理解しやすくなる．したがって，自我同一性の確立，あるいは同一性障害という見方をするだけでなく，併せて分離個体化の観点から青年の心理的な問題や症状を捉えることが，青年期の心性を理解したり，青年を対象とした心理臨床を進めたりする上で役立つことが示唆された．

しかし，青年期の分離個体化を全般的に把握する手段としては，現在のところ本研究で用いた質問紙しか開発されていない．もちろん，質問紙による測定も必要であり，その信頼性や妥当性の検討も行われるべきである．けれども，分離個体化は心の内面に形成された対象関係を表す発達的な観点であり，意識している内容を答える質問紙法では自ずと限界がある．したがって，質問紙の開発と併せて，投影法などによる無意識的な反応によって青年期の分離個体化の様相を把握する方法を考案することも今後の課題となるだろう．

【要約】

自我同一性と分離個体化の関連を明らかにするために，大学生を対象にそれらに関する質問紙を実施して，自我同一性によって分離個体化の様相がどのように異なるのかについて検討した．

そのために，まず，JASITAを実施し，大学生の分離個体化を規定する要因を明らかにした．その結果，「友人関係の未確立」「両親からの分離欲求」「自惚れ」「両親との親密さ欲求」「一人でいられなさ」「分離個体化の達成」の6つの要因が確認された．

次に，自我同一性地位によって分離個体化の様相がどのように異なるのかについて明らかにした．同一性達成地位では，両親との心理的な分離を果たしているが，まだのみこまれ不安を持っている．けれども，他者との境界の確立がなされ，両親から友人への備給の転換が適切になされているので，自我理想の形成が進んでいる．権威受容地位では，両親との心理的な共生状態が継続しており，自己愛が高まったままで自惚れが強い．友人関係は確立されていると感じ不適応感はないが，他者との境界があいまいなままである．モラトリアム地位では，同一性達成地位とほとんど違いがみられず，その地位へと移行する途上にあると考えられる．両親から脱備給したリビドーを友人へ向け変え，自我理想を形成しようと努め，自己投入の対象を希求している．同一性拡散地位では，両親に対して分離不安ものみこまれ不安も強く，独立－依存の葛藤が強いことが窺われる．そのために，他者との境界を形成できず，友人にリビドーの転換をはかることも困難であり，自己評価も低い．

このような結果から，自我同一性だけでなく，分離個体化という観点を用いることで，青年期の心性や心理的な問題を持つ青年の理解が深まることが示唆された．

引用文献

Blos, P. 1962 *On adolescence : A psychoanalytic interpretation.* New York: Free-Press.（野沢栄司訳1971 青年期の精神医学　誠信書房）

Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child,* **22,** 162-186. New York: International Universities Press.

Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle.* New York: International Universities Press.（小此木啓吾編訳　1973　自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル　誠信書房）

加藤　厚　1983　大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究，**31**(4)，292-302.

Levine, J. B., Green, C.J., & Millon,T. 1986 The Separation-Individuation Test of Adolescence. *Journal of Personality Assessment,* **50**(1)，123-137.

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 The psychological birth of the human infant:Symbiosis and individuation. New York: Basic Books.（高橋・織田・浜畑訳　1981　乳幼児の心理的誕生：母子共生と個体化　黎明書房）

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* **3,** 551-558.

中西信男　1983　同一性拡散　関・篠置・中西(編)　青年臨床心理学　朝倉書店

西園昌久　1972　自己同一性障害の諸相：現代社会と自己形成障害　教育と医学，**20**(1)，19-26.

小此木啓吾　1980　青春期・青年期の精神分析的発

達論と精神病理　小此木啓吾(編)青年の精神病理　弘文堂
佐野直哉　1990　自我同一性形成をめぐって：Erikson の理論を中心に　北田・馬場・下坂(編)増補精神発達と精神病理　金剛出版
高橋蔵人　1989　青年期のおける分離個体化に関する研究：質問紙調査による考察　心理臨床学研究 **7**(2), 4-14.
Winnicott, D. W. 1965 The maturational processes and the facilitating environment. London: The Hogarth Press.（牛島定信訳　1977　情緒発達の精神分析理論　岩崎学術出版社）